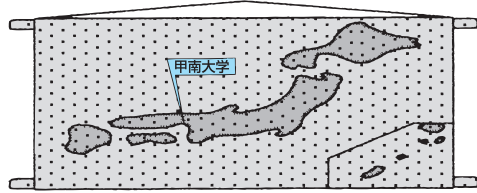


Zephyr

〈第73号〉

ゼフィール・にしかぜ



<http://www.konan-u.ac.jp/kilc>

《特集＊外国語教育の現場で気がついた文化の諸相》

★所長からのメッセージ：～ことばの諸相：コミュニケーションと文化～	藤原三枝子	2
〔英語〕 Common Sense.. Not So Common?	S. McNamara	3
〔ドイツ語〕 ドイツ語の授業に見る日本とドイツのコミュニケーションスタイル	野村 幸宏	4
〔フランス語〕 日本でフランス語教育に携わって発見したこと	ディディエ・シッシュ	5
〔中国語〕 「ちゃんぽん」を考える	胡 金定	6
〔韓国語〕 韓国語の学習における学習者の一断面	金 泰虎	7
〔日本語〕 日本語の無意識に働く構造を教えてみて	谷守 正寛	8

甲南学園創設者
平生夙三郎

「世界に通用する
紳士・淑女たれ」



「英語＋1（第2外国語）」
教育プログラム

「使える外国語教育」

国際言語文化センター機関紙（年3回刊行）

Homines dum docent discunt Men learn while they teach

国際言語文化センター准教授 吉田 桂子

甲南大学国際言語文化センターでは、韓国語、中国語、ドイツ語、日本語、フランス語、英語の運用能力の習得と各言語文化と国際社会全体についての理解を目指した授業、講義、学習支援、海外語学講座、社会人講習会、社会人講座を行っています。

少人数で学習者中心かつ双方向でコミュニケーションな言語科目の授業、リアクションペーパー、レポート、グループ発表などで学習者の考察を見る言語文化・国際理解関連の講義、学習者に合った学習方略を共に考え実施する外国語学習相談アワー、留学生によるチューター制度、外国語強化合宿などの学習支援、留学前相談を経て学習者を送り出す海外語学講座、生涯学習と地域交流を推進する社会人講習会や社会人講座、これらは全て、担当する教員にとって、多様な学習者との言語文化学習を通して得られる学びと発見の宝庫なのです。

今回は、甲南大学国際言語文化センターの各言語の教員が日々の教育活動においてどのような発見や認識を新たにしているのか、外国語教育の現場における実際の例を見ていきましょう。自らも外国語学習（経験）者であり、現在2言語以上を日常的に使用している本センター教員が見ている言語文化の諸相とはどのようなものなのでしょうか。

～ことばの諸相：コミュニケーションと文化～

国際言語文化センター所長 藤原 三枝子

日本の外国語教育の目標は、少なくとも中等教育においては、知っているかどうかを問う、従来の言語知識の積み上げ型から「言語を使って何ができるか」(can-do)という運用能力の養成に置かれるようになってきました。例えば、すでに2009年度の高等学校学習指導要領外国語の改訂の趣旨の中では、文法は文法として学習するのではなく、言語活動と一体的に行うように改善することを求めています。その一方、今年1月～3月に筆者が複数の大学で学生たちに対して行った聴き取り調査からは、高等学校における英語教育はあまり変わっていないような印象を受けます。こうした中で、これまでのセンター試験に代わり2021年度入学者選抜から導入される大学入学共通テストの英語では、「聞く」「読む」「話す」「書く」の4技能を評価することになり、その際に、「言語を使って何ができるか」によって言語能力を定めているCEFR (*Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*) 『ヨーロッパ言語共通参照枠』を評価の共通の土台として用いています。

このヨーロッパで生まれたCEFRの理念が日本の外国語教育において正しく理解されているか、という根本的な問題について論じることは次の機会に取っておくこととして、「ことばの使用」に関して、日々の授業等でも実感していることは、ことばそのものに対して置く価値が日本と欧米文化圏では異なる、ということです。アメリカの文化人類学者、エドワード・ホールは*Beyond Culture* (邦訳『文化を超えて』)の中で、伝えるべき情報はすべてことばの中にあると考える「低文脈文化」と、言いたいことをすべて言語化しなくても状況(文脈)から相手に理解してもらうことを期待する「高文脈文化」とを区別し、日本の文化は高文脈文化(つまり「察しの文化」と捉えています。例えば、語用論的に相手への愛情表現を考えると、英語では*I love you*. ドイツ語では*Ich liebe dich*. 日本語では(夏目漱石の英語の授業に関する逸話によれば)「月は綺麗ですね。」ということでしょうか。以前、別の機会にも書いたことですが、キリスト教を根拠とする文化圏を理解するときに聖書は重要です。新約聖書のヨハネによる福音書は「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」で始まります。この「ことば」は、ギリシャ語の「ロゴス」の訳で、英知や知性を意味し、人が話す言葉そのものを指しているのではないということですが、英語では「the Word」、ドイツ語でも「das Wort」と翻訳されています。すこし突拍子もない考えかもしれませんが、「ことば=真実」という価値観をここに感じます。「空気を読む」ことを大事にする高文脈文化の日本においては、自分の意図や考えを的確に理解してもらうために、論理的に説明したり、反論・説得したりできる能力の養成を教育の目的とすることは、かなりハードルが高いと感じられます。

小学校の1年生・2年生で子どもたちが学ぶ教科に生活科があります。この科目の教育のねらいは、具体的な経験や体験をとおして自立への基礎を養うことのようにですが、手元にある1年生の教科書の最初「学校と生活」では、「みんなとともだちになろう」がテーマとなっています。どのページも、複数で一緒に活動する子どもたちの様子が描かれています。一方、生活科に対応するドイツの科目Sachunterricht(事実授業)の教科書を見ると、その最初のテーマは、「Ich」(私)で、「Ich bin ich.」(私は私)がキー概念となっています。このテーマの最後の結論ページで、それまで様々な「ich」を演じてきたパントマイマーが鏡で自分自身をじっと見つめる写真は、この科目のねらいを的確に表しています。生活の基本を身につけることを目的とした小学校1年の教科書の最初の課には、それぞれの国がどのような子どもを育てることを目指しているかが如実に現れていると言えるでしょう。

異なる文化を背景とした人とのコミュニケーションでは、同質の文化、仲間同士で共有するフィーリングや察しが通用しない場合が多く、私個人としての考えを論理的に説明する必要性が高くなります。「言語を使って何ができるか」という運用能力の養成は、教育の本質にも深く関わっています。

Common Sense.. Not So Common?

国際言語文化センター英語特定任期教員 S. McNamara

On teaching a communication class, with a linguistic target of making complaints and polite requests, the topic of “manners on the train” was given as a warm up activity. Students were asked which manners bother them on the train, and asked to explain why, with the hope of giving them opportunities to use the expressions in short conversations.

A student, let’s call him Sen, mentioned that others talking on the phone incensed him. Not being innocent of this myself, I said, “Come on, Sen. Explain why in a sentence”. After some reticence, he stated, “it’s our common sense”. I disagreed. To me, in no sense would this be an issue of common sense, regardless of it being a cause of offence. So I wondered, is Sen’s idea of “common sense” different to his *sensei*’s? Maybe there is more than one meaning to the phrase.

Meaning 1: Common Sense is a Shared Set of Values

In this version, “common” means “shared” or “prevalent”. That is, “common sense” is a shared understanding about the correct way of doing things. Due to this, it can be seen as having similarities to the idea of manners. Sen, above, sees common sense in this way. Talking on the phone is a violation of “our” social order because it is not often done; he didn’t mention it being rude for the noise and annoyance it could create. This may be a characteristically Japanese view of the phrase. This argument is supported if one sees Japan as a group-oriented society with a high regard for social order (perhaps born of the pragmatics of generations living in near proximity on a populous island), and it could even be hinted at by the first *kanji* of the new era.

Meaning 2: Common Sense is Basic Intelligence

This view of the phrase is the one I grew up with in Australia, it could be a common western understanding of the term. Consider the following phrase: “She has more dollars than sense”. The meaning of the phrase is, she is wealthy but foolish (it also includes a play on the words sense/cents). In this phrase, very often employed in English conversation, “sense” is a synonym for intelligence. Further, the title of this piece is another popular phrase, with the unfortunate meaning that most people are unintelligent. Indeed, the Oxford dictionary defines the word in a similar way, as “the ability to think about things in a practical way and make sensible decisions”. This is supported in my experience as a boy: I just may have been implored to “use some common sense!”, when undertaking some particularly risky (and enjoyable) task, but not for breaking a social rule.

ドイツ語の授業に見る 日本とドイツのコミュニケーションスタイル

国際言語文化センター講師 野村幸宏

甲南大学における1年生の基礎ドイツ語の授業では、ドイツ語による基礎的なコミュニケーション能力を身につけることを目標としています。コミュニケーションとは、文字や口頭による意味の伝達を含む概念ですが、ここでは口頭のコミュニケーションについて、授業をしながら再確認したことをお話したいと思います。

外国語を学べば、その言語を使用する人々とコミュニケーションを取る助けになるのは言うまでもない事実なのですが、外国語で正確な文を作ることができるだけで円滑なコミュニケーションが取れるというわけでもありません。外国語を操り、言葉自体は通じているものの、どうもコミュニケーションがぎくしゃくするというケースがよくあるのです。その原因として考えられることは複数あるのですが、その中の一つを授業の中でトレーニングするように個人的に心がけています。それは「情報の組み立て方」の違いです。

これを意識するようになったのは、ドイツ人が書いた、東洋人とのビジネスの際に必要な異文化間能力についての書籍を読んだのがきっかけでした。

ドイツ人が東アジア人を散歩に誘う場合

「散歩に行くんだけど、一緒にどう？ 天気もいいし、空気もいいし。ちょっと体動かすのもいいよね。昨日買った上着も着ていけるし。どう？」

東アジア人がドイツ人を散歩に誘う場合

東：今日いい天気だね。
独：そうだね。
東：今日は空気もいいね。
独：そうだね。
東：ちょっと体を動かすのもいいよね。
独：うん、本当だね。
東：昨日新しい上着買ったんだ。
独：そうなんだ。
東：ちょっと散歩にでも行かない？

Hanne Seelmann-Holzmann, Global Players brauchen
Kulturkompetenz, 129 ページより引用

少しオーバーに提示されているところもあるかもしれませんが、私たち日本人の話の流れはどちらかと問われるとやはり後者の方に近いのではないのでしょうか。後者の会話は一問一答式で、目的である散歩への誘いに段階的に持っていくように見えます。質問を重ねながら、相手の反応を逐一観察し、見極めながら会話を組み立てています。引用元の筆者は、この会話を以下のように分析しています。東アジアでは、相手の顔を立てる、相手の顔をつぶさないことが重要であり、散歩に誘う方は誘いを断られることを無意識に避けることで自分を守り、

また誘った相手がそれを断らなければならない状況を作ってはいけないという意識が作用するため、このような情報の組み立てを行う、と述べています。

この分析が正しいのかどうかはさておき、文化が違うと同じ目的をもってコミュニケーションを取ろうとしても、このように組み立て方が大きく異なるという興味深い例です。例のようにドイツ人が単刀直入に日本人を散歩に誘う場合、やや強引に感じられたり、逆に日本人がドイツ人を誘うと少々回りくどく感じたりするかもしれません。実際、大学の授業で自由に会話する練習を行ったときに、学生同士の会話を聞いていると、「元気？」「元気。」「今日は何か予定ある？」「大学。」「そのあとは？」「バイト。」という会話の流れが多いように感じます。おそらくドイツ人から見ると、「この会話の目的は何だろう？」「なぜ予定を聞いているのだろう？」と不思議に思うかもしれません。

つまり、ドイツ語を学ぶにあたって、日本語をそのままドイツ語に訳してコミュニケーションを取っても、文が正確であるにもかかわらず、何とも言えない違和感が残ってしまうケースが出てくるわけです。だからと言って、ドイツ人と話すときはなんでもダイレクトに言えばいいんだよ、相手の気持ちを考えなくてもいいんだよ、と指導するのも極端すぎます。結局は授業の中で様々な「本物の」あるいは「本物に近い」コミュニケーション場面を多数扱い、言語そのものの正確さだけでなく、情報の組み立て方、ドイツ社会における行動や言動の「ストライクゾーン」を意識しながら学ぶこと、そして、そういう目標を持った授業を行うことが重要になります。授業をしながらもまだまだそうした要素をうまく取り入れられていない、と自分で感じることも多いのですが、少しでもこうしたコミュニケーションの文化的要素を意識した授業を目指しています。

日本でフランス語教育に携わって発見したこと

国際言語文化センター教授 ディディエ・シッシュ

フランス語学習の目的は、フランス語でのコミュニケーション力を高めると同時に、言語の背景にある文化や習慣の違いを学習者に意識させることだと言えるでしょう。また、フランス人教員としては、もっと深く自国の文化と日本文化の違いを理解するきっかけにもなります。ただ、その過程で幾つかの問題に直面することも少なくありません。

まず、「沈黙」の問題です。教員にとって、授業中の「沈黙の扱い」は大きなチャレンジです。日本の学生は自分の意見を述べることにあまり慣れていないため、教員にとって、学生に議論させるのが非常に難しいのです。特に、無口の学生に対しては、フランス人の教員は違和感を感じる事が多いです。フランス人同士の会話の中では、沈黙は「賢者の証」ではありません。敵意の表れか、何も言うことが無い愚か者と思われてしまいます。また、「わかりません」という答えは避けるべきです。無知な人だと思われてしまいます。フランスでは、言葉少なに控えているよりも、しつこい程自分の意見を述べるほうがいいのです。日本とは逆だと言えるかもしれません。日本では「沈黙」はネガティブな反応ではなく、むしろ、教員への尊敬、学生自身の控え目な態度の表れだと言えますが、そうした事情を知らないフランス人の教員は、学生の態度を誤解する恐れがあります。

次に、選択する「sujets」(話題)の違いです。コミュニケーションの授業の目的は、学生に自分の意見を述べるための道具を与えることですが、慎重にテーマを選ぶ必要があります。それぞれの文化によって、「プライバシー」の概念も異なります。例えば、日本では、子供の通う学校や親の勤める会社の名前を聞かないほうが良いようですが、フランスではそんなことはありません。逆に、フランス人は「アイデンティティー」の意識も非常に強いので、信仰など個人の内面についての話題は避けるほうがいいです。また、フランス人は政治に大きな関心をもっていますので、現代の日本の政治体制や社会や経済の特徴を説明ができることが望ましいです。ただ、日本では政治に関心を持つ学生は少ないように見受けられます。グローバル化とともに、フランス人は日本文化への関心を高めていますが、フランス人が注目する日本文化と、日本人が特徴的だと考える日本文化は、異なっていることも多いようです。漫画や映画の分野で、フランスで高く評価されている作家や作品が、必ずしも日本で知られているとは限りません。また、日本で人気のあるフランスのシャンソンや映画が、必ずしもフランスで知られているとは限りません。したがって、日本の学生の反応が、フランス人教員には、自分の文化を再発見するきっかけにもなります。

もう一つは、人間関係の問題です。日本社会は「縦社会」ですが、フランスでは、人間関係にあまり上下という意識がありません。年上の人への敬語、客への敬語などはあまりありません。これは、フランスが日本のような「縦社会」ではないことに由来しています。ただし、フランス語には tu (きみ) と vous (あなた) という2つの二人称代名詞があり、対話者同士の距離によって使い分けます。また、フランスでは、議論の中で「空気を読む」必要がありません。自分の考えであれば、他の人と違っていても全く問題ないのです。「周りに合わせなくていい」こと、「違う意見があるのが当たり前」であること、これらは、フランス文化の優れた特性です。フランス人は、時々、「culture du débat 討論の文化」を自慢しますが、これまで日本で教えた経験のお陰で、それが決して普遍的でないことに気づかされました。

外国語を教えるということは、単に「言葉を教える」ことではありません。「savoir-être」ということも教えるべきです。être とは、フランス語で「実存」・「存在」という意味の最も重要な言葉です。「savoir-être」を直訳すれば、「(自分自身の) ありかた」となります。

外国語を学習し異文化を理解することが、学習者の生活、更には人生を充実させることに繋がるのが外国語・異文化を学ぶことの究極の目的です。知識を増やすのが目的ではなく、新しい知識を得たことで、それまでの自分や自分を取り巻く世界を見直す能力を持つ、つまり世界観や価値観を相対化することが重要でしょう。そして、それは同時に、教員にも、自分の言語と文化についてさまざまなことを再発見させる機会にもなります。学生と教員の間には、正に「interaction」(相互作用)があると言えるでしょう。

「ちゃんぽん」を考える

国際言語文化センター教授 胡 金 定

「ちゃんぽん」と言えば、長崎の名物料理「長崎ちゃんぽん」や、異なる種類のお酒を「ちゃんぽんで飲む」などの言い回しで耳なじみの言葉ででしょう。しかし、その語源や、漢字表記はご存じでしょうか？

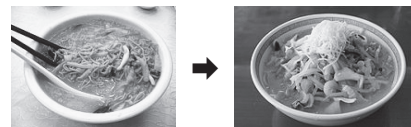
「ちゃんぽん」という発音の漢字は「攪(chān)」と「雑(zá)」で、「攪雑(chān zá)」という福建省から来た言葉だと言われます。「攪(chān)」はさまざまな物を混ぜることを意味し、食物を油で炒めて調味料を入れ、すぐに火からおろし煮る料理法を意味する「烹(pēng)」が語源だと言われています。

また、江戸時代、鉦(しょう)の音「チャン」と、鼓(こ)の音「ポン」という擬音語を「鉦鼓」=「チャンポン」とつなげた造語であるという説もあります。

1978年発行の三省堂国語辞典第三版に、「ちゃんぽん」の漢字表記として「攪烹」が記載されており、「攪」及び「烹」の字義及び発音については、1977年発行「旺文社 漢和中辞典」に記載されています。以下引用します。

『長崎ちゃんぽんの語源については諸説あります。福建語の挨拶「吃飯(Chī fàn)」もしくは「吃飯了(Chī fàn le)」(直訳するなら「飯は食ったか?」)から来ているとの説、同じく福建語の「混ぜる」を意味する語「攪混」から来ているとする説が存在しますが、福建省の方言の発音は、「シェーブン」に近く、「攪烹(chān pēng)」の方が「ちゃんぽん」、「campur」や「チャンプルー」により近いと言えます。』

明治時代、福建省の陳平順が長崎市で経営していた中華料理店「四海楼」は、当時日本を訪れていた大勢の中国人(当時清国人)留学生に、安くて栄養価の高い食事を食べさせるために考案したのが今の「長崎ちゃんぽん」のルーツだと言われています。



福建料理の海鮮焗麵 → 長崎のちゃんぽん

濃厚な味ながら中国からの留学生や書生の好物で、長崎市内に何か所もある中華レストランで「ちゃんぽん」が提供されていました。

そのレシピですが、豚肉、ネギ、野菜、蒲鉾などの魚肉生産品など十数種の具材をラードで炒め、豚骨と鶏ガラで取ったスープで味を調えます。そこにちゃんぽん用の太い麺を入れて煮立てます。煮立てるといいう調理法が、他の中華麺類料理と大きく異なります。さらに、「長崎ちゃんぽん」は「長崎県内で製造され、『唐灰汁(とうあく)』と呼ばれる長崎独特の『かんすい』で製麺したもの」と規定されています。そのため、他県で製造されたものと成分が異なり、独特の風味があります。

「長崎ちゃんぽん」に影響を受けたとされる麺料理が日本全国に存在しています。特に九州各地のご当地ちゃんぽんは、スープや具材など長崎ちゃんぽんの特徴を強く引き継いでいます。さらに九州各地の濃厚な豚骨ラーメンも、長崎ちゃんぽんの影響を大なり小なり受けています。

福建省福清市には、「焗麵(メンミエン)」と呼ばれる材料・味・見かけ・作り方が「長崎ちゃんぽん」とよく似ている麺料理があり、現在も広く食べられています。福州語では「焗八(モウンマイツ)」といい、先に鍋で具を炒めてからスープと麺を加えて煮ます。

日本のラーメンの原型となった中国の麺料理のことを、中国では「拉麵」、台湾や香港などでは「拉麵」と書きますが、これは、もともとは「拉麵」だったのを、1956年に中国が簡体字という簡略化された字体を導入したため中国では「拉麵」と書くようになりました。

「拉麵」の「拉」とは「伸ばす」という意味、「麵」とはもともと「小麦粉」という意味です。麺を作る時、長く伸ばすので「拉麵」と言うのです。この拉麵が幕末から明治にかけてチャイナタウンの中国人を通して伝わり、日本の「ラーメン」になったと言われます。

その拉麵の作り方ですが、お湯を入れてよくこねた小麦粉を長く伸ばし、たたみ、さらに伸ばすという工程を何回か繰り返し、細い麺にします。この工程によってモチモチした独特の触感が生まれます。すべて手作業で行われます。生地を細く切っていく他の中国麺や日本のうどん・蕎麦とは異なります。

「ちゃんぽん」一つとっても、日本と中国が文化的に影響し合い歴史をつくってきたことが分かります。これからも大いに、「ちゃんぽん」を楽しみましょう。

韓国学の学習における学習者の一断面

国際言語文化センター教授 金 泰 虎

「〇〇学」とは、大まかにいえば対象とする国家や地域の言語、文化、社会、地理、歴史などの多様な分野を扱う学問や教育を指しますが、その意味で日本の各大学で教えている韓国語は韓国学の範疇に入ります。とりわけ外国語の学習には善かれ悪しかれ学習者の母国語が学習に大きな影響を与えているという見解は学界の定説で韓国語の学習にも例外ではありません。

しかし、他にも学習者に大きな影響を及ぼしているのは、日本社会の仕来りや習慣などですが、それは社会生活や集団生活を営む中で無言の掟、時代の反映のような事柄と言えることでしょう。すなわち、言語学習の場では学習の対象とする言語の言語学的難題はもとより、日本社会の特徴が言語学習に多大な壁として立ちはだかっており、グローバル時代の特徴も韓国語学習の場に追い打ちをかけています。

日本社会には「出る杭は打たれる」という諺がありますが、そこから波及される「横並びの考え方」が学習者の中にも強く存在していると言えます。このことは目立つのを嫌い、わからないことがあっても質問をしない、学習者が学習の場で必要な意見も述べない、大きく声をあげて読まないといった行動につながっています。

学習者が意見を述べるのは、期末に無記名で実施される授業に関するアンケート調査の紙面です。そこには、内容がわからなかった、説明が難しかった、板書がよく見えなかった、教室が暑かったといった意見がよくみられます。これらは、その場で意見を述べて正したり、解決したりしないと、「後の祭り」になる事柄であるにも関わらず、学習者は不思議なほど学習の場で意見を述べないのです。その背景は、目立ちすぎるのを嫌うことや間違いを恐れすぎて発言できなくなるということなどが考えられます。

そして、日本社会の「曖昧な精神」も言語学習の場では言語習得に悪影響を与えていると言えます。日本人学習者は学習環境や社会環境として、はっきり言われたり、優劣をつけられたりする雰囲気慣れていないため、韓国語の学習の際、発音が正しくないとの指摘をされたり、発音を訂正されたりすると機嫌が悪くなる傾向にあります。しかしながら言語学習の場では、即座に評価や訂正がなければ、学習者自身にとっては正しくできているかどうか判断しかねます。

一方、英語の教育の場では、教師が「Excellent」、「Very Good」、「Good」、「Not Good」、「That's correct」といった評価を行っても日本人学習者にとっては、それほど違和感はないようです。そこには英語が国際語としての存在感があるためか、あるいはGHQ支配以来の英語に対する憧れなのか、それとも取り上げた評価の意味が日本語ほど伝わっていないのか、その理由は定かではありませんが、英語の授業ではその場での評価が通用しています。

さらに、学習者が筆記とメモ、つまり文字を書こうとしない傾向が強いですが、これはタッチパネルなどに慣れているグローバル時代の影響と言えます。言語学習においての筆記は欠くことのできない学習行為です。

これらのことが日本人学習者の外国語、つまり韓国語の学習の場でみられる一断面なのです。要するに、日本社会は日本人学習者に外国語の学習には向かわせない要素を提供していると同時にグローバル時代の特徴も加わっていると考えます。学習の場で「出る杭は打たれる」に伴う横並びの考え方やはっきりさせず曖昧に処理することを打破しない限り、外国語の上達には楽しさよりは難しさが優ることになるでしょう。特に日本人学習者には、慣れている漢字でもアルファベットでもない韓国語のハングルという固有の文字は、何度も手で書いて練習をしないと覚えられません。

真の外国語教育と、その教育によって学習者に実力を身につけさせるために、上記で述べてきたことは克服しなければならない、また解決すべき課題でもあると言えます。

日本語の無意識に働く構造を教えてみて

国際言語文化センター准教授 谷 守 正 寛

本号テーマの「文化の諸相」の言う文化とは、芸術や文学の知的成果として人類に共有される行動・生活様式の総体を指すでしょうから、当然言語も含まれるので筆者の場合は日本語のそれについて授業現場で気づいたことを紹介します。教科書ではあまり扱われない「は」と「が」といった類義の語の違いについては、実は先ず文構造上の違いを知ることが肝要です。母語話者でさえ言語形式の差による違いを明示的に意識することはあまりないでしょうが、例えば、外見上は類似の二文①「太郎はたぶんゴルフをしないので行かないだろう」と、②「太郎はたぶんゴルフをしないから行かないだろう」の本質的な違いにお気づきになるでしょうか。また「太郎はたぶんゴルフをしないので花子は行かないだろう」とすると概ね言いにくくなるのに対し、「太郎はたぶんゴルフをしないから花子は行かないだろう」は依然言えます。語順の異なる英語で理由を表すこの部分を表すと、①は because he doesn't play golf、②は because probably Taro doesn't play golf となり明確な違いが顕現してくるところが中級レベルの留学生の興味を引き、日本語のレベルアップを図るのに日本語教育で生かせることに最近改めて気づきました。紙幅の関係上詳述はしませんが、視覚的に示せば構造の差は下のように露呈します。さらに第二文では「花子は」が入れます。

[太郎はたぶん [ゴルフをしないので] 行かないだろう]。

[[太郎はたぶんゴルフをしないから] (彼は／花子は) 行かないだろう]。

これは「ので」句は「は」を含み得ず「から」句は含み得るということで理解できます。「たぶん」と同様の立ち位置を示す「まさか」も日本語独特の副詞です。

[太郎はまさか [競馬をしないので] 行かないだろう]。

[[太郎はまさか競馬をしないから] (彼は) 行かないだろう]。

言うまでもなくそれぞれ“I can't believe Taro will go to the racetrack because he doesn't play horses”, “Because I can't believe Taro plays horses, I guess he won't go to the racetrack.”となりパズルが解けるように違いが見えてきます。従属句末に「だろう」を入れてみると「競馬はしないだろうので」は言えず、「太郎はまさか競馬はしないだろうから」が言えるところも面白い現象です。「ので」は中立的に「から」は主観的に理由を表現しますが、実はこうした構造的違いがまずあるのです。いずれも「は」の立ち位置も明確に異なるのが分かります。つまり「太郎はまさかゴルフをしないので、花子は行かないだろう」は言いづらくなりますが、この辺が外国人話者には分かりにくく「は」などを適切に使えないままになるのでしょう。授業で言及し学生が興味を示した「て」を構造と共に例示しましょう（*は非文法的表現）。

③ [太郎は [* (花子は／が) 音楽をかけて] 寝ます]。

④ [太郎は [* (花子は／が) シャワーを浴びて] * (花子は／が) 寝ます]。

⑤ [太郎は [花子 (が／*は) シャワーを浴びて] * (花子は／が) ほっとした]。

⑥ [太郎 (は／が) シャワーを浴びて] [花子 (は／が) 寝ます]。

順を追って上の違いが理解できれば、母語話者であっても日本語でもっとも頻用する「は」と「て」の組合せがかなり駆使できるようになるはずです。上の「て」が順に付帯状況、継起の事態、理由、並列事態を表し、それによって「は」や「が」（多くの他の成分も同様に）の係り方が違ってきて、それを知れば洗練された日本語文が表現できるようになるでしょう。よく問題にされる「は」と「が」の意味的な違いは、③④⑤の文頭と⑥のように両方が言える場合に限って微妙なものとして、構造とは別に問われるものです（ここでは説明は割愛）。こういった言語現象は研究による知見にはありますが、教育の現場であまり扱われておらず、自然に習得するには難解な側面だと考えます。授業で教えてみたところ、意外にも反応のよい留学生がいることが分かり見直すべきものとして、同時に母語話者であっても気づきにくく面白く役に立つ言語現象の一例として紹介しました。